

Obituary of the Late Mr. Miyoshi Furuse

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hatsusima, Sumihiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055591

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



追悼文

○ 初島住彦：古瀬 義氏の死を悼む Sumihiko Hatusima: Obituary of the Late Mr. Miyoshi Furuse

キバナコウリンカ (*Senecio furusei* Kitam.) で知られ本会の会員でもあった日本一の植物採集家古瀬義氏が7月4日84才で亡くなられた。古瀬氏は日本では稀に見る異色の植物採集家で、その経歴は本人が語りがらないのではっきりしないが、出身は長野県で最初旧制の松本高等学校に入学したが1年で退学している。退学の理由ははっきりしないが思想問題であつたらしく、警察沙汰になるところを当時人事院総裁であつた佐藤達夫氏の口ききで事なきをえたと聞いている。その後東京の慈恵会医大に入学したが、ここも1年で止め、しばらくは故小泉秀雄氏の標本整理を手伝っていたが、そのうち欧州航路の船の船長となり、ロンドンではよく Kew 植物園に行き知人もできたと聞いている。終戦後は東京都のバスの運転手となり定年退職と同時にジュラルミンのライトバンを購入し、それに寝泊りしながら夫婦で北は北海道から南は琉球の八重山群島まで採集し、昭和47年から1ヶ年間石垣島のオモト岳山麓の公民館に寝泊りして八重山群島を広く採集している。また小笠原にも2回行っている。氏の採集標本は10万とも15万ともいわれ、その量はまさに日本一と思う(牧野博士の採品は30万点ともいわれていたが、他から鑑定のため送られた標本が多く、牧野自身の採品の数ははっきりしない)。筆者は数年前栃木市の古瀬氏を訪問したことがあるが、採集品は大きな茶箱に納められ部屋の中に高く積上げられていたが、箱の数は50個位はあったように記憶している。古瀬氏はこり性で標本の採り方、製作法は丁寧をきわめ出来上がった標本は正に芸術作品で、その立派なことは日本一だと思う。牧野博士の標本が立派だといわれているが古瀬氏の標本はそれを上まわっている。製作法は牧野博士の乾燥法と同じで新聞紙に挟んだものに特別製の平たい石の重しをし、新聞紙を毎日取替える方法であるが、変った法といえば塵紙を総ての標本の間にふんだんに使っていることである。古瀬氏は標本に field no. を記入しているが、何時頃から番号をつけはじめたかはっきりしないが最近の標本には57,000台の番号がついている。採集品は以前は大井、北村両博士に鑑定のため送られていたが、琉球植物の鑑定を私が引受けるようになってから死の直前まで氏の標本の鑑定は私が引受けていた。琉球列島の採品は私が琉大にいた関係で私が鑑定後1組を琉大に寄贈した。最近では中国の学者とも交流があったようで氏が本州で採集したミスズランの一種を新種として中国の蘭学者と連名で中国の雑誌に発表している。また最近では山窩に興味を有し九州の阿蘇、長野県などに資料の蒐集のため旅行していたようである。心から御冥福を祈り申し上げます。住所：〒328 栃木市皆川城内町1867-1。

(〒892 鹿児島市吉野町2635-3)

○ 横溝康志：森 邦彦先生を悼む Yasushi Yokomizo: Obituary of the Late Mr. Kunihiko Mori

平成7年11月11日、元山形大学農学部教授、森 邦彦先生(1904~1995)が亡くなられた。筆者は、昭和32年頃先生の教えを受け、湯殿山、月山のフロラ調査に携わったが、当時生憎意気盛りの学生だったにもかかわらず、生活面に至るまで温和にしかも親身にご指導いただいた。口ぐせの「やっぱ」があだ名だった先生は卓球の名手でもあり、白髪に口髭の容姿からは想像できない程の対戦ぶり、学生の間でも一目おかれていた。筆者は卒業後別の道を歩むこととなり、ご恩に報いるべき植物の仕事はほとんどできなかった。しかし、亡くなられる前年にお訪ねする機会があり、ややご不自由ではあったが懐かしい話をさせていただいたのがせめてものご恩返しとなっている。ここで、先生の足跡を紹介して追悼としたい。

森先生は、明治38年福井市にお生まれになったが、父君の都合で大正3年台湾に渡られ、昭和3年台湾総督府高等農林学校林学科を卒業された。1年の兵役後、台北帝国大学に勤務、工藤祐舜先生の教えを受け、昭和14年には付属専門部助教授となられた。主に台湾を中心とした植物の形態学的な研究を進められ、植物研究雑誌、台北農林学会報などに多くの報文を残されている。昭和17年三井農林株式会社社員としてジャワ島に出張された後は研究活動を中断されたがやがて終戦となり、昭和23年には山形県立農林専門学校教授として研究を再開された。同校は昭和25年、現在の山形大学農学部に移行したが継続勤務され、昭和45年に停年退官されるまでのあいだ、主に奥羽地方の植物地理的な研究に精力を注がれた。特にモミ属の分布について山形農林会報、日本林学会誌、植物研究雑誌などに報告されている。また、研究室の学生と庄内地方の各地のフロラ調査をされるのは毎夏の恒例になっていた。退官後は、庄内地方の寒さが余程身にこたえられたのか静岡県湖西町に居を構えられたが、在任中の業績をまとめられ「庄内地方のフロラⅠ~Ⅶ」「北日本産樹木図集」などを発表された。湖西町では民生委員をされるなど、地域の振興にも尽くされたと聞いている。植物をこよなく愛され、また接する人々をも広く愛された先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(〒321 宇都宮市峰1-3-27)